

〔視聽草十集四〕延寶飢饉 當年延寶三年天下大飢饉にて、金子壹兩に米五斗宛是を賣錢百文には黒

米壹升壹合なり、是に依て人民飢にのぞんで死する族多かりし、其趣上に聞し召され、御慈悲を加わへられ、柳原の土手の下に小屋がけ仰付られ、江戸中の貧人ども其所へ呼び集め、施行粥を被下ければ、皆々悦び來りけり、京都にても、四月九日より北野七本松と四條河原にて、江戸のごとく、貧人共に粥を賜わりし、誠に大慈大悲なりし、京都へ御借米二萬俵いでけり、但し表壹軒に付四斗九升九合七勺宛にあたるなり、尤江戸町中へも拜借米仰付らる、然るといえ共、四五年米故俵より出し候て、升にてはかり候へば、過半ふけ候へ共、皆米を大切にいたし候事ゆへ、白などにてつき候へば、古米ゆへことの外へりおほく候間、其ま、黒米にて食し候事となり、御惠みの程有がたく奉存候也。

〔元祿救民記〕元祿十六年癸未の春に至て、餓人次第に増長し、一國忽艱苦に及ぶ元祿十五年壬午七月八月兩度、風

雨洪水饑先公義山内家の御藏を開かれ、彼窮民を救給ふに、正月も過二月に成ば、飢人彌多く、御

小屋に入者二千餘人、其後米穀益乏しく、田地扣家藏持たる者も自然に窮迫す、去ども御救屋に入事を恥て餓死するもの又少からず。

〔兔園會集說〕奥州南部癸卯の荒饑

山崎美成

天明三年癸卯十一月十一日、奥州三戸部南部内藏頭殿房領分、八戸の惠比須屋善六より、本店

江戸田所町かど、井筒屋三郎兵衛へ遣はせし書狀左の如し。略中

一追々御承知可被遊、當地當年凶作前代未聞に御座候、全體去冬寒中甚暖にて、如夏霜月頃より氷候へ共、寒に入悉解、平生三四月頃之氣候に等しく、夫より年明け正月に相成、少々寒く候得共、例年よりは格別暖に御座候、二月三月迄不寒、四月頃より卯辰卯辰風北風計にて、寒中如極寒、雨降、四月中に雨不降日、漸に七日御座候、夫も薄曇東風にて霧雨、晴天は一日も無御座候、五月も同斷に